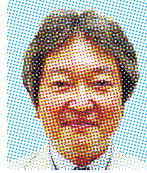


ろんだん
佐賀



朝長 修さん

ともながクリニック院長

ともなが・おさむ 1960年生まれ。嬉野市(旧嬉野町)出身。鹿島高―長崎大医学部卒。1987年に東京女子医科大学糖尿病センターに入局、専門医として特に糖尿病性腎症、腎不全の治療に従事する。2006年、ともながクリニック糖尿病生活習慣病センター(新宿区)を開設。東京女子医科大学糖尿病センター非常勤講師。東京都。

私は父やその兄弟たちと同じ鹿島高校出身です。ご存知の方も多いかと思いますが、鹿島高校は適度に進学校で、適度にそうではなく、実に雑多な人間の集まりでした。嬉野中学から入学したのは30人ほどで少数派でした。何となく肩身の狭い気持ちでいるところに太良、大浦など海沿いからやってきた生徒は言葉も気質も違っていました。3年間でいろんな友達がたくさんできました。文芸部に在籍しましたが、何をやるわけでもなく、放課後に部室にたむろし、あまりほめられない時間を過ごしたものです。

鹿島高校出身者として

東京でもすごい人脈に

でも赤門をくぐって登校した3年間は自分の人生にとつて宝です。

東京に出て来てからも鹿島高校とは不思議な縁の連続です。研修医時代、白衣を着たままで病院の前を歩いていると、タクシーの窓を開けて叫び声で、「修くん！ 修君じゃなかね？ そんな格好っていうことはお医者さんになったとね？

良かった、あとでここに電話して！」と文芸部の友人Y子さんが連絡先のメモをくれました。大声、方言丸出しで、一緒に歩いていた同僚はあぜんとしていました。バブル絶頂期、Y子さんは当時、女子医大の隣にあったフジテレビにお仕事に向かうところでした。Y子さんは勤勉でなかった私のことをよ

く知っており、大学も行かず、身を持ち崩したかもしれないと心配していたそうです。白衣姿の私を発見し、驚喜してくれました。この後、東京の同級生とも連絡が取れるようになりました。

当時の研修医は薄給で、頻繁に当直バイトに行っていました。ある日、三鷹駅北口の病院に向かう途中、

ひげ面の青年がすれ違いざまに、「ありゃ？ 朝長さんじゃなかと？ こがんとこでなんばしよつと？」と声をかけてきました。文芸部の2年後輩、N夫君でした。お互い東京にいることを知らなかったのが驚きでした。もちろんこの後、当直病院に連行、空白の時間の足取りを確認し合いました。

さらに衝撃的な出会いが続きました。私は音楽鑑賞が趣味で、渋谷のAspen Glowというライブバーに出入りするようになりました。この店にはブルース、ハワイアン、フォーク、カントリー、ロックを分け隔てなく好むマスター石田氏がいて、私は意気投合しました。ここでたくさんのミュージシャン、関係

者に出会いました。残念ながら石田氏はがんで亡くなり、お店も閉店しました。私の東京での仕事以外の人脈はAspen Glowで始まり、その仲間は30年後の今も、Aspen Glow難民と称してつるんでいます。

ました。何となく田舎くさい、どこかなまったしゃべり口にも、もしやと話しかけたところ、なんと鹿島高校の同級生S君のお兄さんでした。まあ、驚きでした。音楽の好みも合い、大盛り上がりでした。かなり飲んだあげく、「わいは今日はおうちに来ない」と誘われました。笹塚のアパートにお邪魔し、明け方までレ

コードを聞きながら酒を飲んで、翌朝、這々の体で病院に向かいました。この後、Aspen GlowではS君さんに、先のN夫君、これまた文芸部の友人N子さんの兄、R平氏を中心とした鹿島高校OBだけのバンドも出演することになりました。恐るべし鹿島高校。

(次回に続く)